

「経済の変動」の展開

大阪府高校教諭

1 はじめに

経済の理論に関するところは、生徒にとっては最も難しいところのようだ。GDPなどのマクロ経済は、需要・供給などのミクロ経済とは異なり、具体的な、身近に感じられる話を織り交ぜにくい。今回、『高校生の新現代社会（初訂版）』（以下、教科書）のp.66に「GDPを面積でおきかえた世界地図」が入っている。この図は南北問題でよく見る地図であり、最初は違和感を感じたが、この地図を導入として用い、『標準高等地図（初訂版）』（以下、地図帳）も用いる授業実践例を考えてみた。

2 導入

まず、地図帳p.5「①経済の地図[C]」（教科書p.66図①と同じ）を見させてみよう。p.1の一般的な世界地図や「②人口の地図[C]」と比べて、面積の大きい地域・小さい地域はたやすく答えられるだろ

う。さらに、地図帳p.20写真[C]を見れば、明るいとところと面積が大きくなっている地域が一致する。このあたりで、（一人あたり）GDPの多い国＝「豊かな」先進国、したがって、GDPが「豊かさ」の尺度であることを確認しておこう。

3 GDP

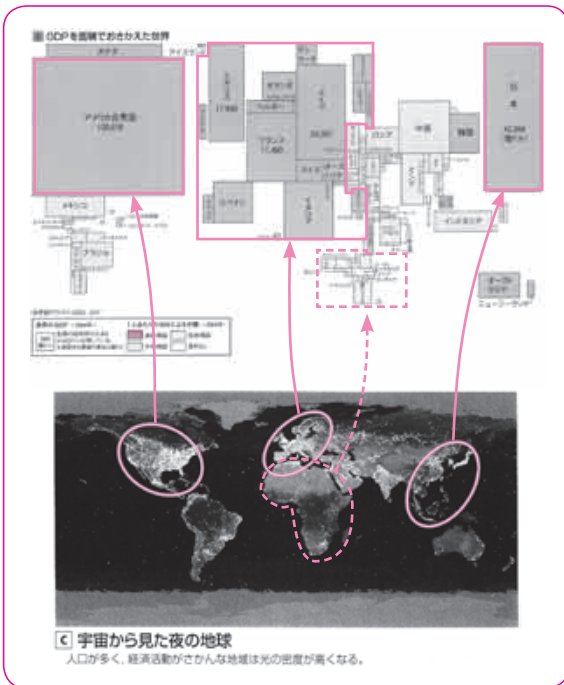
さて、ではGDPとは何の数字なのだろうか、という問いから本論がスタートする。単純に、「GDPとは、その国で1年間に産み出された付加価値の合計である」ということがわかればそれでいいのだが、付加価値とは何かを説明しなければならぬ。「生産物の価値－中間生産物の価値」なのだが、具体例は必要である。私はリンゴとリンゴジュースを例に使っている。

例：リンゴ1個50円、リンゴ1個を用いてリンゴジュースが1杯つくられ、1杯100円で販売される。

リンゴジュースの価値は100円であるが、ジュース屋さんが産み出した価値は材料代50円を引いた50円である。材料代が中間生産物であり、ジュース屋さんが産み出した価値が付加価値である。付け加えるならば、リンゴの価値50円は農家が産み出した付加価値である。これらの付加価値を日本中全部加えたものが、日本のGDPとなる。

とりあえず、ここまで理解できれば本質的には十分であると思うが、時間に余裕があれば、次のような練習問題が可能である。

問：リンゴとリンゴジュースの生産しか行っていない国の例を考える。リンゴジュース1杯を生産するのに、リンゴ1個を必要とする。ある年に、この国の生産量と価格は次の表の通りであった。この国のGDPを求めよ。



『標準高等地図（初訂版）』 p.5、20

	価格	生産量
リンゴ	50円/個	120個
ジュース	100円/杯	80杯

答：リンゴの付加価値：50円×120個=6,000円
 ジュースの付加価値：
 (100円-50円)×80杯=4,000円
GDP=6,000円+4,000円=10,000円 (答)

ここで、「GDPの多い国=たくさんモノが生産されている国=経済活動が活発な国」を確認しておく。もちろん、日本もその一員である。

4 三面等価の原則・GNPとGNI

まずは、三面等価の原則は難しくならないように、かつていねいに説明しておこう。「リンゴジュースは、リンゴ農家がつくった部分とジュース屋さんがつくった部分に分けられます。これが生産面」のように、一つのモノを三面からとらえると少しはイメージしやすいだろう。

次いで、GNPが登場する。教科書p.66①では、いきなりGNI（国民総所得）が出てくるが、GDPと比較するためにはGNPのほうがいいだろう。

$$\text{GNP} = \text{GDP} + \text{海外からの要素所得} - \text{海外への要素所得}$$

上記の式を書いてみよう。「GNP=GDP+海外からの純所得」と書かれてあるテキストも見うけられるが、プラスとマイナスを分けて書いたほうがわかりやすい。日本のGDPは日本国内で生産された付加価値であり、日本国民（この場合の「国民」は「居住者」）が産み出した価値とは必ずしも一致しない。GDPから外国人が産み出した価値を引き、外国で日本国民が産み出した価値を加えるとGNPになる。これを押さえたうえで「N」と「D」を使い分ける意味を考えさせてみよう。

生産活動の活発さを示すのは、「D」の方が実感にあう。国内の生産活動が停滞し、外国に出稼ぎに行かなければならないなら、経済活動は停滞していると感じるだろう。「N」が実感をもつ

は、私たちがどれくらいの生活水準にあるか、ということを知りたいときである。そこで計算されるのが、分配面・支出面から見たGNI・GNE（国民総支出）である。政治・経済の授業ならば、内訳をチェックするところだが、ここでは深入りせず先へ進もう。GNI=GDPだから、GDPと直接比較できることになる。ここまで来て、三面等価の原則を用いることができた。

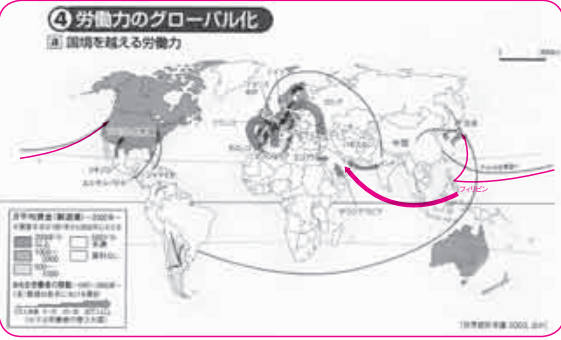
GNPとGDPの数値の違いから何がわかるだろうか。日本ではほとんど差がないが、ルクセンブルク（1人あたりGDPが最大の国である）とフィリピンを見てみよう。次の表を提示する。

	GDP	GNI
ルクセンブルク	31,864	25,559
フィリピン	84,567	95,085

(単位100万ドル、2004年『世界国勢国会』)

ルクセンブルクはGDPがGNIを上回っている。フィリピンは逆である。これらは何を意味しているのだろうか、生徒に考えさせる。

ルクセンブルクは国内総生産の比較的大きな部分を外国人が産み出している、つまり周囲の国から労働者が働きに来ているようである。実際、ルクセンブルクは小国ながら、欧州有数の金融センターとなっている。それを可能としているのが、EUにおける人やモノ、お金の移動の自由化であるので、できればそこまで授業を発展させたい。一方、フィリピンはどうか。フィリピン国民は国民総所得（=国民総生産）の相当な部分を外国で稼いでいるということがわかる。そこで、地図帳p.18④a)を見てみよう。実際、フィリピンはアラブ諸国などへの海外出稼ぎが多い国であることが確認



【標準高等地図(初訂版)】p.18④

できる。国民所得計算から国・地域の特徴へと関心を広げさせることが可能である。

5 景気変動と物価変動

これまでに見てきた流れを踏まえて、「GDPの額が増加する = 生活水準が向上する」という前提で、経済成長、経済成長率、好況、不況、景気変動という言葉を確認しておこう。そして、日本のGNPの推移を示してみよう。

1963年	1973年	1983年	1993年	2003年
181	1,153	2,785	4,806	5,023

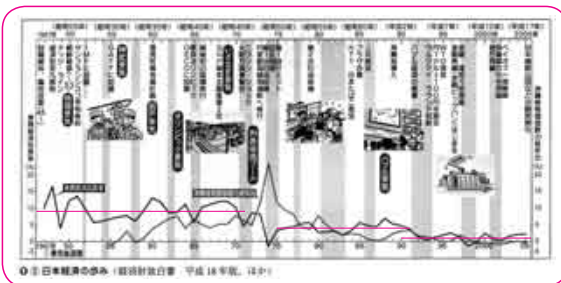
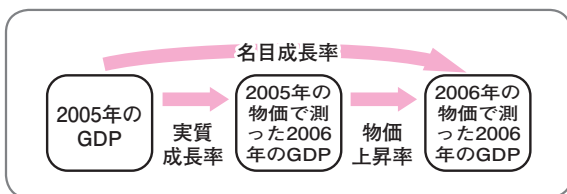
(単位千億円、「日本国勢図会」)

1963年に比べると、2003年は約28倍に増えている。ここで教科書p.67図③を見させ、GDP (GNP)の増加にあわせて、物価も上昇していることを確認し、実質経済成長率という言葉が用いられていることに触れておこう。GDPが物価の変化で水増しされると、実際にどれだけのモノが生産・消費されたか、つまり物質的にどれだけ豊かになったかがわかりにくくなる。そのため、物価はまったく変動していないと仮定した実質経済成長率を計算していると解説しておく。要するに、この40年間で28倍豊かになったわけではないということである。

余裕があれば、次の例を出してみるとよい。

	生産量	価格
2005年	100個	100円/個
2006年	120個	120円/個

2005年のGDPは10,000円で、2006年は14,400円である。したがって、名目経済成長率は44%となるが、物価は20%上昇している。そこで物価は変動していないと仮定し、2005年の価格を使って計算すると、2006年のGDPは12,000円で、経済成長率は20%である。この20%という数値が実質経済成長率である。私は物価上昇率との関係について、次のように板書している。



『高校生の新現代社会(初訂版)』p.67③

物価上昇率が出てきたところでインフレーション・デフレーションの用語を説明しておく。あとは、グラフから、高度経済成長期、低成長期、バブル崩壊後の平成不況におけるトレンドラインを読み取らせよう。普通、トレンドラインより上が好況、下が不況とされる。「高度経済成長期」「平成不況」と呼ばれるなかにも、景気変動が見られることにも注目させ、景気循環の種類へとつなげる。次に、再び教科書p.64の「現場から」に戻り、人々の所得が増加したときには、どのようなセリの結果になるか考えさせよう。経済成長率が高いときには物価上昇率も高いということを、下記のように前時の内容を踏まえて説明し、その逆パターンとして、2000年代はじめごろの「デフレスパイラル」の解説につなげていく。

好況時の物価上昇

- ①需要の増加 → 需要曲線が右上に
- ②労働力不足 →
- 賃金の上昇 → 供給曲線が左上に

6 まとめ

GDPや経済成長率は普段からニュースなどで出てくる言葉であり、政府や日本銀行が経済政策を行う判断基準となっているばかりか、私たちの就職、企業活動や賃金にも深くかかわっているものである。しかし、ということで、教科書p.66下7行にあるような、GDPの限界を指摘しておき、生徒の価値判断が経済成長至上主義に陥らないように留意しなければならない。

(参考資料)

福田慎一、照山博司『マクロ経済学・入門』第2版、有斐閣アルマ、2001年